人間文化創成科学論叢　第10巻　2007年

日本語教育の相互学習型活動における日本語母語話者と非母語話者の関係性の転換

——大学授業でのグループワークの相互行為から——

杉　原　由　美*

Change of Relationship between Foreign and Japanese University Students in Japanese Language Class Activities

SUGIHARA Yumi

abstract

This paper aims to discuss about Japanese language education programs based on the concept of promoting 'cultural and linguistic symbiosis' between Japanese native speakers and non-native speakers in Japan. This study focuses on how asymmetrical relationship changes into symmetrical relationship. Subject of this study are foreign and Japanese university students involved in group-activities.

Based on the method known as Conversation Analysis, this paper shows how the participants themselves construct the categories of 'native/ non-native speakers' in ongoing interaction which results in asymmetrical interaction. Moreover, the focus is also on how participants can break through an asymmetrical interaction achieve a more symmetrical relationship.

Keywords : symbiosis, Japanese native speaker, non-native speaker, class activities, conversation analysis

1. はじめに

世界規模での人的移動により、近年、日本でも多言語・多文化という形での共生化の過程がドラスティックに進行しつつある。様々な社会的側面が複雑に連動して進む共生化について、本研究では、その一つの動きと考えられる「日本語母語話者（以下NS[1]と記す）と非母語話者（以下NNSと記す）の相互学習型活動」に注目し、具体的な活動の分析から、NSとNNSによる共生過程の理解を深める一助としたい。

NSとNNSの相互学習型活動は、日本語教育の領域では、大学生や地域住民を対象として試みられている。このタイプの活動は、直接的には、地域や大学の中で隣人として生活していながら人間的接触の少ないことが問題視されるマイノリティとしてのNNSとマジョリティとしてのNSが、対話をする機会を持つことによって互いに豊かな学びを得る可能性に期待して試みられているものである。そして、より本質的には、多言語と多文化という形での共生化の過程を如何に生産的に推し進めていくかという課題を実践的に追求する場としての意義があると考える。しかし、様々な文脈で共生の内実が問われている（戴2003、植田他2006など）ように、相互学習型

キーワード：共生、日本語母語話者、非母語話者、相互学習、会話分析

＊平成14年度生　国際日本学専攻

活動においても、NNSとNSの共生の推進は容易な課題ではない。例えば、地域住民を対象とした相互学習型活動の相互行為についての研究（岡崎他2007、杉原2003など）から、その場では聞き流されていってしまうような会話の中で、NNSに対してNSが如何に力を持った存在であるか、また共生が如何に困難を伴う長い道のりであるかを実感させる様々な問題が指摘されている。

議論を進める前提として、本研究においては共生をどう考えているか、概念的に定義しておく。まず、全生命を貫く原理としての「共生発生（symbiogienesis）」に基づいてNSとNNSの接触場面での共生について論じている岡崎（2003）に依拠して、共生概念を捉えたい。岡崎によると、共生とは異なる種に属する生物同士が接触を保ちつつ共に生活することであり、それによって新たな共生体や形質（新しい器官や行動・特性）が生まれ、困難な環境条件の下での両者の存続が可能となり、更にこの新たな共生体は環境を変えていくという。この見方によると、NSとNNSの接触場面は次のように捉えることができる。

「（NNSとNSの接触が日常化するという）新たな言語・文化状況の中で、自己の持つリソースに依拠しながら相手側の言語・文化とのネゴシエーションを通じて、参入側（NNS）・受け入れ側（NS）双方に言語的共生化・文化的共生化の過程が形成される。共生化の過程の下では、そのままでは各自の能力を十分生かすことのできない状況で、新たに統合的な能力を形成することで両者の存続の展望が切り拓かれていく。（岡崎同上:23）」そして、「接触場面とその背景にある社会的条件の変動に基づく困難という環境全体を変え（岡崎同上：27）」ていくという事態が生まれる。

では、このような共生化は、共生化の過程を目的意識的に促進することが目指されている相互学習型活動ではどのように起きているのだろうか。本研究では、大学の授業で行われたNSとNNSの相互学習型活動を対象として、活動中のディスカッションの相互行為におけるNS・NNS間の関係性の転換として現われる共生化の過程に注目する。

2. 先行研究と研究目的

大学での相互学習型活動は、1990年代以降、従来は留学生のみを対象としていた日本事情教育に、日本人学生を加えた合同授業として試みられるようになった。足立他（2000）は、この合同授業[2]を、留学生と日本人学生が、対等的・継続的・体験的に参加する学習として特徴づけている。日本語の教室にNSがゲストとして参加するビジターセッションと違い、合同授業は、両者共に学期を通して参加し、共に単位が認定され、また講義形式ではない演習形式の授業である。授業の具体的な目的は多様であるが、留学生と日本人学生が人間的に接触する場を提供し、そこで意味のあるやり取りを行わせることで相互理解の促進を図るという点では一致している。

このような合同授業を対象とした研究としては、一方には実践の詳細な報告（梶原2003など）や授業への参加が参加者の意識に及ぼす影響を探ったもの（岩井2006など）があり、他方には、授業中のNS・NNS間のやり取りの特徴を探ったもの（杉原2007など）がある。杉原（2007）は合同授業においてなされたグループディスカッション16事例を会話分析の手法を援用して分析した。その結果、一見単なる役割分担にしか見えないNS・NNS間の相互行為上の非対称性が微細な権力作用として機能し、NSによる力の行使を生んでいることを指摘した。そして、そうした権力作用に参加者が無自覚のうちに巻き込まれていくことへの警戒感を喚起している。

地域日本語教育を取り上げた研究においては従来からこうしたNS・NNS間に存在する力関係を批判的に捉える議論が活発に行われてきた（森本2001、金.野々口2007など）。他方、大学における合同授業を取り上げた研究においては、如何にして効果的に留学生と日本人学生の異文化理解や異文化受容を促進できるかという視点の下に論じられることが主流であった（梶原2003、岩井2006など）。背景としては、年齢的にも社会階層としても同じ大学生であることから、対等な関係が前提的に想定されていることが考えられる。この点で上記の杉原(2007)の研究は例外といえるものである。

先述した岡崎（2003）によると、接触場面では自己の持つリソースに依拠しながら相手側の言語・文化とのネゴシエーションを通じて、参入側・受け入れ側双方に言語的共生化・文化的共生化の過程が形成されるという。この共生化の過程という観点から、上記の杉原が指摘した相互行為で観察されたNSとNNSの非対称性とNSによる権力行使という問題を見てみると、NSとNNSのネゴシエーションが負の作用として互いに働いているか、も

しくは共生化の過程のごく初期的な段階に留まっている[3]ために、浮き彫りになった現象と考えられる。では、NSとNNSの非対称的な関係性は、ネゴシエーションを通じてNSとNNS双方が共生化の深化を志向するような関係性へと転換する可能性があるのだろうか。また共生化の過程の下で創出されるという「新たな統合的な能力」「新たな共生の様式」や環境の変化はどのようにして現実のものとなっているのだろうか。

このような問いに答えるために、本研究では、NSとNNSの相互学習型活動のある1つのディスカッションを事例として、進行中の会話のやりとりの中で立ち上がってくる参加者間の関係性を微視的に観察する方法を採る。研究目的は、NSとNNSの非対称的な関係性が共生化の深化を志向する様な関係性へと転換する現象を浮き彫りにし、共生化を生産的に推し進めていくための示唆を得ることである。NSとNNSの関係性の転換が会話の中でどのように成し遂げられたかを探ることを具体的な研究課題とし、ある合同授業でなされた相互学習型活動としてのグループワークを分析対象とした。そして、「共生化の過程」について考察する。

3. 研究方法

3. 1　分析方法

本研究では、相互学習場面におけるNSとNNSの関係性のありようを記述するために、エスノメソドロジーの会話分析の手法を援用する。エスノメソドロジーとは、社会的事実を自明視せずメンバーの相互行為の結果達成されるものと見なし、ある社会や集団に属している人が無意識的に用いている考え方ややり方を探究する社会学の1つの視点である。そしてその中の方法論の1つである会話分析は、会話のなされ方について多くの秩序や規則を解明してきており、会話の中に形式的な特徴として立ち現れる社会構造や文脈を観察するために有効な枠組みを提供している。

Shegloff（1991）は、会話分析を用いて、会話に現れる階級.民族.世代.性差.職業的な関係性及び地位や力関係という「社会構造」を記述する際の指針を大まかに2つ提示している。曰く、会話の参与者たちのふるまいを詳細に分析することによって、①その文脈や状況の特徴が参与者たちにとって有意味であり、参与者たち自身によって方向付けられている（oriented to）こと、②その文脈や状況が、いかにして、会話のあり方にある特定の帰結（形式.方式.性格.内容）をもたらすのか、の2つを示す必要がある。更にWatson（1997：73）は、会話の中では「会話の連鎖的な流れ（sequential phenomena）」と「成員カテゴリー化（categorical phenomena）」がコインの表裏のように密接に絡み合って、上に述べた「社会構造」の一つ一つがつくられる点に注目した分析視点を提案した。本研究ではこれらの指針に従い、会話の連鎖の順番取得組織の1面である「発話の重なり」と、「成員カテゴリー化装置」（Sacks,1995）という2つのふるまいの面から、社会構造として現れる参加者の関係性を詳細に分析する。

「発話の重なり」には、意図的に発話を重ねて1つの文を2人で作る現象と、偶発的･結果的に重なってしまった現象がある。重なりの処理のされ方を見ることで、どちらのタイプであるかを判断することができる。串田（2006）は、日本語の多人数での日常会話を対象に、発話の重なりを詳細に分析して、「会話に参加するやり方の違いによってどんな社会的行為が行われ、どんな社会的関係が作り出されているのか」について考察している。本研究では串田の知見を参考にして、会話に参加するやり方によって参加者らが社会的行為を行い分け、「チーム」として互いに社会的関係を作り合っていく動きを分析する。そして、その「チーム」が何者としてのチームなのかを捉えるために「成員カテゴリー化装置」に注目する。この装置は、会話の参与者自身が、どのような方法に従って自分を含む参与者をあるカテゴリーに属すると位置付け、またそのカテゴリー化実践がどのようなことと関連するのかを示す一連の概念である。例えば「母親」「父親」「子供」というカテゴリーは、『家族』カテゴリー集合という装置に属し、「大人」「子供」は対比される「大人／子供」カテゴリー対という装置に属している。人はいくつかの帰属するカテゴリーを持っていて、発話の度に少なくともその内1つのカテゴリーに当てはめられる。また、ある人があるカテゴリー化装置に分類されると自動的に他の人も同じ装置で分類される可能性がある。本研究では以上の2つの分析概念を用い、会話の連鎖的流れの組み立てられ方の変化と成員カテゴリー化の変化という2つの動きに注目する。この2つの変化の動きが連動する際には、ShegloffやWatsonがいうところの社会構造が変化し、よって参加者の関係性の転換が起こると予想される。それらの成し遂げられるさまを記述する。

3. 2　研究対象

某女子大学で2002年度に行われた合同授業における相互学習型活動を対象とする。この授業は週1コマ90分で、参加者は留学生16名（国籍10カ国）、日本人学生12名の計28名であった。半期12コマの授業の内、前半6回は教師がテーマを提起してのグループディスカッション[4]、後半6回は各自興味を持ったテーマで6班を形成し「ある問題の実情を詳しく調べる」「ある問題をいくつかの国の場合と比べて調べる」「あるテーマについての意識を調査する」「あるテーマを徹底的に議論する」という選択肢の中でグループワークをして、最終回には班発表、個人レポート提出という流れで行われた。筆者はこの授業において参与観察を行い録画資料を収集した。

本研究では、グループワーク「女性の生き方」班の5回中[5] 3回目にあたる約50分のディスカッションの録画データを対象とする。参加者は4名（仮名）で、田中（学部1年）、佐藤（学部3年）、チン（中国の学部4年、来日2ヵ月半の日研生）、ヘレナ（チェコスロバキアの院生、来日4ヶ月の院の研究生）であり、アンケート調査がディスカッションの議題である。当該事例を対象とする理由は、NSとNNSの相互行為上の非対称性が際立って顕在化している場面が長く続いた[6]後に、ディスカッション後半に参加者の関係性の転換と解釈される場面が見られたためである。

4. 分析の結果

本章では、分析の結果を以下の手順で示していく。第1にディスカッション冒頭部において、会話の参加の仕方が参与者たちによって方向付けられる様を、会話の重なりを中心としたふるまいを分析することによって示す。第2に、本研究の注目する参加者間の関係性の転換場面に目を移す。まず転換直前のやり取りを示して、冒頭部から変わらぬやり取りのパターンが続いていることを示す。次に関係性の転換場面について、会話の重なりからNSとNNSがどのような関係にあるかを示した上で、成員カテゴリー化の現象を詳細に分析する。最後に、会話の連鎖的特徴について、それまで続いていたパターンと比較する。第3に、事例全体を通した分析により、関係性の転換のポイントについて総括する。なお文字化の記号は稿末に記す。

4. 1　参加者間の関係性の形成

会話例1　ディスカッション冒頭場面（雑談しながら着席し、沈黙9秒の後）

→01 田中：どうしましょうか、［なんか　、　清書してきてくれたんですけどー＝
→02 佐藤：　　［どうしましょ
03 佐藤：＝あ、昨日もー、話し合いの、まとめた、＝
04 チン：んー
→05 佐藤：＝ですけどーんー［(と)今日聞いて゜いて゜］
→06 田中：　　［なんかこれが、すごく］いいじゃないですか＝
　　{教師配布の資料を手に}
07 佐藤：＝えへへへー
08 ヘレナ：はーん、そうそう。
→09 田中：これーの、これー、と、［比較？］　、　するとすご［い、いいですよね？
→10 佐藤：　　［比較　］するー？
11 ヘレナ：　　［んー、　　んー。

この会話例で顕著な特徴として現れているのは、発話01 & 02、05 & 06、09 & 10に見られる田中と佐藤の発話の重なりである。重なりには2つのタイプがあり、上記3つの箇所のように重なっても修復のための発話の再生がなく「継続」される仕方は、発話者が自分は重なりに同意しており互いが競合関係にないことを示す手続きである。（串田2006）特に、発話09 & 10では、田中の「これーの、これー、と」を聞きながら、佐藤は統語的に次に来る語彙を予測してタイミングを合わせて言葉を一致させ、「比較する」をより説得力のあるアイデアであるように提示する「共同的ユニゾン」（串田同上）を行っている。これは、2人の者が「チーム」（串田同上）を形成して、第3者に向けてより効果的に共同行為を行う手続きと考えることができる。そして何者としてのチー

ムかというと、同じ調査班のアンケート作成メンバーに関する成員カテゴリー装置が想定される。この冒頭部分のみでの特定は難しいが「清書などするまとめ係／まとめ係でない人」という成員カテゴリー装置が考えられる。この間、チンとヘレナは相槌を打ち（発話04、08、11）、田中と佐藤への合意を示しているのみである。このような発話の１つ１つが積み重ねられ、田中と佐藤が２人でチームとして話し合いの舵をとり、チンとヘレナは相槌を打って進行に協力するという会話の仕方が編成され、相互行為上の非対称性が立ち現れる。

4. 2　関係性の転換への導入部

以降40分間続く会話の流れを大雑把に把握すると、主に田中と佐藤が説明を共同で作り上げ、折々にヘレナとチンに意見を求めることで、全体のコンセンサスを図っていくという組み立てられ方として特徴付けられる。ただ、田中と佐藤によって意見を求められていない事柄に対しても、チンは発言することがあった。すると、「瑣末なこと」「焦点のずれたこと」として扱われ、チンの意見は流されるという場面が散見された。

関係性の転換が起こる場面として注目するのは、チンが合計４回意見を却下された後で、１度却下された意見を再度提起するという冒頭から40分後の場面である。

この場面では、まず、アンケートのある質問項目で、選択肢「イ」を選んだ人が次に続く一連の質問に答えるという設問の仕方について、「イ」を選択しなかった回答者が無駄に質問を読まなくてもいいように、別立てした質問項目をつくって矢印などで導くという方法をチンが提案する。チンは一度却下された意見を再度提案するからか、呼気を交え、ためらいがちに「ん、ここにやっぱりわたｈしhh、ちょっとhhもし、クエスチョン７の一点1、ここにイを書いた人に聞く、これに、あの２つの問題、出した、ら？」と言った。その提案発話から約14ターンを経て次の会話例２が続く。田中と佐藤が反論をし、チンの提案は簡単には受け入れられない。

会話例２　チンの提案提起と、田中と佐藤の反論

01 チン：こうか、書いたらーみんなよ［ん
02 ヘレナ：　　［読む？
03 チン：読む、でしょ？
04 田中：でも［みんな］一旦は読みますよ。
05 佐藤：　　［うん？］
06 ヘレナ：んー？
→07 田中：みんな一旦読ん［でー、［°あの°　　わたしは　　］書かなくていいんだわって思って、＝
→08 佐藤：　　［°うん°［あこれ自分°じゃない#°］
09 田中：＝次に行くんーだから。
10 ヘレナ：そうーこれは
11 チン：んー、もし私だったら、これ、どしてこんなｈｈにｈｈ。うん、何回も何回も、答えーたことに、答えたことに、はーｈ［ｈｈｈ、はー
12 佐藤：　　［あーそっか。

まず、発話07と08の田中と佐藤の反論発話に注目したい。冒頭部と同じパターンで田中と佐藤がチームとして結託している強固さが現れているといえる。

発話07で田中が「みんな一旦読んで」と言うのを佐藤は聞き、「°うん°」とモニターしながら、次に来る発話が「みんな」のセリフだと予測して、わざわざ重なるようにタイミングを見計らって「あこれ自分°じゃない#°」と言っている。発話07と08の文字化資料の構成から、２人は交互に声の大小と速度をコントロールして、重なっていてもどちらの発話も意味がとれる部分が聞こえる二重奏のように絶妙に組み立てていることが分かる。串田（2006）は「声を合わせて過去の誰かの言葉を再現する」という「引用のユニゾン」について、会話の内部において過去の経験という文脈が今ここに関連あるものとして構成される仕方であると述べている。この発話07と08においても同様の原理が働いていると考えられる[7]。２人は過去の「アンケートを答える者としての経験」を共通に持つ者としての成員カテゴリー化装置を想起させている。ユニゾンは「共同行為をより効果的・決定的に差し出すことで、抵抗の可能性に対処する方法」（串田同上）としても用いられる手続きであり、２人はチンを連携して説得しようとして発話07と08の重なりを形成していると考えられる。そして、結果的に、チームとしての

連帯をチンとヘレナにアピールする効果を生んでいる。それに対して、発話10でヘレナは2人の意見に同意しようとしているように見え、発話11でチンは笑いともため息ともつかない呼気を交えてひるんだ様子を見せながらも自分の主張を繰り返す。そして、発話12で佐藤は一旦チンの発話を受け止め、6秒の沈黙後に、次の会話例3での発話14を続ける。

以下の会話例3では、チンが抵抗の申し立てを行うと共に、カテゴリー化の操作を試みる点に注目する。

4. 3　関係性の転換　ー成員カテゴリー化の変化

会話例3　チンの異議申し立て場面（会話例2から連続）

13　　{沈黙6秒}

14 佐藤：何だろ、そういうアンケートをー、えっと今までになん、やったことがあるかないかの違い、かなっとも思うんです［けど

15 チン：　　［あるだ、ここでも。

16 佐藤：ありますか？＝

17 チン：＝あり［ます。

→18 佐藤：　　［そういう時に［やっぱそう思ったってことですね［ー

⇨19 チン：　　［あのーここにー、　　［どんな人に聞く、

20 佐藤：うんうんうん

⇨21 チン：ね、どんな人［に＃＃］

→22 佐藤：　　［その時］にー、チンさんがそう思ったってことですよね。

23 チン：うんうん

24 佐藤：そっかー。［でも、°うん°

25 田中：　　［でも、聞き方はー、私たちがどう思っているよりはー、なんか、うーん、よくわからない。

まず、発話の重なりから、この場面ではチンと佐藤が競合的関係にあることが読み取れる。発話17～19で生じたチンと佐藤の発話の重なりは、両者共それぞれ発話21（⇨部分）と22（→部分）で修復のための「再生」（串田2006）を行っていて、これまでの会話例1と2の田中と佐藤による重なりとは異なるタイプで、互いに競合的関係にあることを示しあう重なりであるといえる。

そして、ここでは、成員カテゴリー化のせめぎあいも生じている。まず、佐藤は発話14でチンの提案の妥当性に疑問を投げかけるとともに、先の場面で二重奏のような重なり発話で想起させた成員カテゴリー化を言葉で具体化して「そういうアンケートの経験者／未経験者」というカテゴリー対を呈示した。それに対して、チンはまだ佐藤の発話途中にさえぎる形で発話15「あるだ、ここでも」と応えた。倒置の形で「ここ」と声も大きく強調している。こうすることで、チンが何をしようとしているのか、詳細に分析したい。

「ここ」が「この大学」を指していると考える[8]と、「この大学でも（やったことが）ある」という発話に対して想像されるのは「出身国（中国）の大学でも（やったことが）ある」である。つまり、チンは「あるだ」という発話のみでは「出身国の大学で経験がある」と解釈される可能性があることを懸念し、急いで「ここでも」を強調して追加したといえるのではないか。自己を「ここ、日本でのアンケート経験者」であり、田中と佐藤と同じ成員カテゴリーに属しており、したがってアンケート作成において意味ある提案ができるいわば有能者として自己を呈示する試みだと考えられる。つまり、チンは「そういうアンケート経験者／未経験者」という佐藤によるカテゴリー化が、実は「ここ」以外の経験が経験として認められないカテゴリー化であることに気づいているのであろう。その認識に基づいて、自分の提案が却下されないために、価値あるものに見せるにはどう働きかけたらよいのかを考え、瞬間的なやり取りの中で、カテゴリー化の操作を試みていると考えられる。

同時に、発話15と17とも間髪入れぬすばやい応答である点から、クレイム性の強さを感じさせる。すなわち、今ここのやりとりを覆っているカテゴリー化が不当だという強い異議申し立てである。「ここでも」と「ここ」を強調することは、参加者らに「アンケート経験者／未経験者」に「ここ日本／出身国」という対比が関わって境界が引かれていることに気づかせる。チンは暗黙のうちに潜んでいたカテゴリー化を表に出し、参加者たちに対して異議を申し立てたといえる。

そして、佐藤は発話22と24で「その時にチンさんがそう思ったってことですよね。そっかー」と言い、チンの「日本でのアンケート経験者」の自己呈示を一旦承認したように見える。そして、田中は発話25「でも、聞き方はー、私たちがどう思っているよりはー、なんか、うーん、よくわからない」で、「私たち」という表現を用いてチンも含めたように見えるカテゴリー化を提示した。つまり、チンはカテゴリー化を操作して境界線の位置を引き直すことに成功し、佐藤・田中と同じ立場に立ったと考えられる。

この後、紙幅の関係から会話例は省略するが、チンは、発話24・25の佐藤と田中の「でも」と一枚岩となった反駁にもひるまず、自分の提案を紙に書いて説明した。そして、遂に佐藤は「そこでまあ、うん、ちょっと納得するんだったら、こういうふうにした方がいいと思います。」とチンの提案を受け入れたのである。その受け入れの発話を契機に、以下の会話例4に示すチンの提案の内容的な検討に入る。

4. 4　関係性の転換　ー会話の連鎖のあり方の変化

会話例4　チンの提案を検討する場面

01 田中：ここが＃＃、だったら、これもそれに含めたほうがいいですよね。
02 佐藤：ああ、そうですねー、問い9。
03 田中：なー、で
04 佐藤：そうですねー［うん。
→05 田中：　　［ア、アと答えた人だけじゃなく［て、これもアとイと答えた人でしょ］
→06 チン：　　［　うん うん うん。 ああ、 うん　］うん、はい。
07 佐藤：ああ、そうです［ね
→08 チン：　　［こんなふうに、なって。
⇨09 田中：うん、アだけじゃないですよね。どち［らでもいいわけだからー
⇨10 ヘレナ：　　［うん、そそそ。　　うん。
11 佐藤：うんうんうん
12 田中：あーのー、
⇨13 ヘレナ：これもアとイです。
→14 田中：で、子供が、
→15 チン：これ全部一緒ーですねー

この会話では、田中の発話05の確認に対して、チンが発話06・08で応答（→部分）。田中の発話09の確認に対して、発話10～13にかけてヘレナが応答（⇨部分）。田中の発話14を15でチンが引き取っている（→部分）。誰が次話者になるのかという視点から見ると、各人とも等しく機会が開かれている様にみえる。また、あいづちや文末の終助詞以外目立った重なりがない。つまり、会話例1と2で特徴的に現れていた会話の連鎖のあり方とは異なる。ここでは誰かと誰かがチームである様なカテゴリー化は見られず、成員カテゴリー化装置は、会話例3の田中による「私たち」（発話25）を踏襲した「アンケート作成メンバー同士」とでもいうもののように推察される。

4. 5　事例全体を通したまとめ

会話例1・2では、発話の重なりやユニゾンといった手続きでの会話の連鎖的特徴から、NSの2人が自身らをチームとしてカテゴリー化している有様が見られた。そして、成員カテゴリー化装置については、「清書などするまとめ係／まとめ係でない人」「そういうアンケート経験者／未経験者」等が現れていた。NSの2人は「清書などするまとめ係」であり「そういうアンケート経験者」であり、常に作業を主導する側にある。つまり、このカテゴリー化は一見すると「NS/NNS」とは関係ない。しかし、NSの2人の意見が優先される側になり続け、NNSは周辺的な側になるカテゴリー化であり、相互行為上の非対称性が形成されていたといえる。

そして、会話例3ではチンの提案の採否をめぐって成員カテゴリー化のせめぎあいが浮かび上がり、会話例4ではチンの提案の内容的な検討を行う中で会話の連鎖のあり方と成員カテゴリー化について、それまでのパターンと異なる有様が浮き彫りになった。この会話例4に至って、振り返ってみると会話例1と2と比べて相互行為の組み立てられ方の変化が際立っており、会話例3を契機に参加者間の関係性の転換が目に見える形で立ち現れ

たといえる。

では、この参加者間の関係性の転換を成立させたポイントは何だったのか。1つは、通常口を閉じていってもおかしくない状況の中で、ぶつかり合いを厭わずに、いかにして自分の意見を意味あるものとして提示するかを追求したチンの姿勢であろう。しかしそれだけで成立が支えられたとは考えにくい。

本研究対象の場に限らず、いわゆるマイノリティがマジョリティのカテゴリーの使用に抗議して変化させることは容易ではない。男女間の会話を対象とした山崎（1994：29）の会話分析研究によると、性別カテゴリーの場合、女性が男性による文脈の履き違えを主張してカテゴリーの使用への抗議を行っても、別の文脈をだすことでその抗議を無効化する行為が循環的になされる可能性がある為、カテゴリーの使用へ抗議することはかなり困難であるという。同様に、本事例ではチンが佐藤によるカテゴリー化に抵抗して「日本でのアンケート経験者」という自己呈示を行ったが、例えば「でも、ここでアンケートしたことがあるといっても何度もしたことはないでしょ？」や「でも、慣れの問題もあるからね」など、経験数や文化的背景から生じる慣れの問題という別の文脈を出すことで、佐藤と田中はチンの自己呈示を無効化することが可能であったと考えられる。つまり、「経験者」といっても物事を1回でも経験していればよい訳ではなく経験数が問題と考えることも可能なのである。また、「日本」は「場所」と「文化的背景」という2種類の意味を含んでいるため、「日本」を単なるアンケートを行った場所の問題と捉えて自身も日本側に属する者としたチンの自己呈示に対して、個人の文化的背景を問題にしてチンを日本側に属する者から排除することも可能だろう。

よって、カテゴリー化は当事者の交渉次第でどの様にも調整され動くものであり、ここで田中と佐藤がチンの「日本でのアンケート経験者」の自己呈示を「受け入れたこと」が重要なポイントとなって、カテゴリー化の境界線の位置が変わったと考えられるのではないだろうか。つまり、いわゆる日本人としての文化的背景を背負った優先権を主張することなく、日本という場所である行為を1回でも経験していれば、同等に意見を言う権利を認めるという田中と佐藤の姿勢[9]が、関係性の転換のもう1つのポイントだと考える。

5. 考察

本事例の分析では、「NS/NNS」の非対称的な関係性から共生化の深化を志向するような関係性への転換を支えたのは、NNSのぶつかり合いを厭わない挑戦とNSによる受け入れであったことが分かった。考察では、本事例で見られた現象を岡崎（2003）の接触場面の共生化についての論考に照らし合わせ、「共生化の過程」への理解を深めたい。

接触場面では、「新たな言語・文化状況の中で、自己の持つリソースに依拠しながら相手側の言語・文化とのネゴシエーションを通じて、参入側（NNS）・受け入れ側（NS）双方に言語的共生化・文化的共生化の過程が形成される」という。本事例での「自己の持つリソース」を、田中と佐藤の思考の枠組みと捉えると、チンの挑戦（具体的にはアンケートの設問方法の提案とカテゴリー操作）によって、やっと共生化の過程に向かう「相手側の言語・文化」とのネゴシエーション（以下「交渉」と記す）が生まれた。つまり、1口に交渉といっても様々なあり方が想定され、本事例のディスカッション前半のように一方が優先され一方が妥協し続けるような交渉では、共生化の深化には向かわない。交渉の中で重要なことは「双方が歩み寄っているかどうか」である。そして、本事例の分析から具体的に明らかになった歩み寄りとは、双方が押したり引いたりの拭き指しならないぶつかり合いの交渉の末に、成員カテゴリー化の境界線を揺さぶるような事態の中で起こったものである。成員カテゴリー化の変化とは、言い換えれば自己・他者認識の一端を変える事態といえ、場合によってはかなりの困難性や痛みを伴うことが推測される。このような双方の困難性を伴った歩み寄りが、共生化の深化に向かう交渉となり得るかどうかの分かれ目となるのではないか。

そして、共生化の下で形成される「新たな統合的な共生の様式および能力」については、本事例では具体的に提示できる目を引くような様式ではなく、長い交渉を通じて結果的にNSのものともNNSのものとも別物となったことが推測される様式であった。また、本研究の分析では「関係性の転換」として注目してきた会話分析的視点が指す「社会構造」の変化は、言い換えれば相互行為上に現れる「状況の変化」であり、共生化の下で起こる「環境の変化」の小さな1歩に当たると推測される。つまり、本事例の中での「新たな様式」も「状況の変化」も、

積み重ねていく先に「新たな能力」や「環境の変化」がある、いわば萌芽と捉えられるのではないだろうか。

6. まとめ

本研究では、NSとNNSの相互学習型活動を対象として、相互行為に現れた参加者の関係性の転換のありようについて、会話の連鎖的な流れと成員カテゴリー化の2面に注目して詳細に観察した。そして観察された現象を接触場面の共生化の理論を軸に考察した。その結果、参加者の関係性の転換を成立させたNSとNNS双方の困難な歩み寄りを伴った交渉のあり方が、共生化の深化へつながる交渉であることを明らかにした。そして、新たな能力と環境の変化の萌芽を見出し、このような形での交渉の積み重ねが共生化の過程を推し進めていく可能性が示唆された。この示唆は、特に、NSとNNSの相互行為上の非対称性が作られ継続している状況において関係性の転換をもたらす上で有益な視点といえるだろう。

さて、最後にNSとNNSの共生化を生産的に推し進める上での具体的な糸口を示したい。マジョリティであるNSにできる初めの一歩としては、無意識のうちに「ここ日本での経験者／（出身国では経験していたとしても）ここ日本では未経験者」というカテゴリー化を潜ませることによって生じる不均衡を認め、いわゆる日本人としての文化的背景を背負った優先権を主張することなく、日本という場所である行為を1回でも経験していれば、同等に意見を言う立場に迎えるということがあげられる。一方、マイノリティであるNNSの歩み寄り[10]としては、どこにあろうと、いかにして自分の意見を意味あるものとして提示していくかという観点から、ぶつかり合いを厭わない姿勢が周囲を巻き込んだ共生化への一歩となると考えられる。

本研究は、NSとNNSの相互学習型活動に現れる共生化の過程について、その一例を示したに過ぎない。今後も具体的な現象を記述する研究を重ね、NSとNNSの相互学習型活動において共生化の過程を生産的に推し進めていくための課題を探っていきたい。

文字化資料記号

[[	発話の重なり。重なった発話は[の並びを上下でそろえる。	=	発話末尾の＝と、次の発話冒頭の＝には、隙間がない。
下線	前後に比べて音量が大きい	°　°	前後に比べて音量が小さい
#	発話不明箇所	(　)	聞き取り確定不能
h	呼気	｛　｝	非言語特記事項

謝辞

本研究にあたって、研究対象の授業実践者･参加者の皆さんにご理解とご協力をいただきましたこと、ならびに、お茶の水女子大学の岡崎眸先生、大妻女子大学の酒井朗先生にご指導をいただきましたことを、ここに記して感謝申し上げます。

付記

本研究は平成18年度科学研究費補助金（若手研究Ｂ）［課題番号：17720122］の成果の一部である。

註

1．NSはnative speaker、NNSはnon-native speakerの略である。

2．足立他（2000）は多文化クラスという名称を用いている。他には混成クラス、合同クラス等の名称もある。

3．現在の日本社会を反映したNSとNNSの非対称的で権力作用を含んだ関係性が散見される状況は、共生化の過程としてはいつか通り過ぎるものとみることもできる。しかし、共生（symbiosis）化が生命の誕生から数億年にも亘る過程であることを考えると、この状況に何十年も留まることも十分考えられ、放置できない問題と捉える。

4．テーマは「ステレオタイプ」「若者の視線平気症候群」「女性の生き方、選択」「あなたにとって豊かな生活とは？」「日本に住む外国人」「コミュニケーション意識を考える」。

5．当該班の5回のグループワークの流れを簡単に説明する。1回目：女性の生き方について、各自どんな観点に興味があり何をしたいのか意見交換の上、他国の女性の生き方も知ることができるような何らかの調査をすることにまとまる。2回目：アンケート調査をすることに決めた上で、何を誰にどこで聞く調査を行うか話し合い、仕事と家庭について当該女子大学の学生（留学生を積極的に含めて）に調査を行うことに決定。3回目：アンケート用紙を具体的に作成する。4回目：録画失敗につき不明だがアンケート調査に加えて各自身近な社会人女性にインタビューも行うことが決まったと想像される。5回目：アンケート集計結果の共有と、各自1～3名にインタビューした内容の共有。6回目：クラスメイトを前に発表。

6．この事例は発話量から概観すると、発話の約75%（文字化資料の総行数から計算）が田中と佐藤の2人の発話で進んでいるものである。だからといって、録画から、チンとヘレナが日本語力の低さが原因で文脈が把握できない及び言いたいことを表現できていない、という様には感じられない。

7．串田（2006）は、結果的に言葉の一致に失敗しているユニゾン失敗例も考察対象とし、重要なことは「言葉を重ね合わせる工夫によって生み出される現象」であって、結果としての一致ではないと述べている。

8．「ここ」が指す場所については、チンの座っている場所を基点として同心円状に広がる場所（この教室→この大学→この地域→この国）のうち、どこを指しているのかこの会話例のみから断定することはできない。

9．本来、日本以外での経験を認めないのは理不尽で、出身国での経験も認めるべきであろう。本研究では、チンが「日本でのアンケート経験者」として自分の意見を通す位置取りを確保したことによって、当該相互学習型活動において「ここ」での経験以外は意味のあるものとしてみなされないという合意がある可能性が浮上している。この点、今後も考えていかなければならない問題と捉えるが、その上でなお、今ここのやりとりにおいてNSに求められる重要な姿勢として、「NNSの日本での経験を認める姿勢」を評価する。

10. 本事例における参加者の関係性の転換は、チンの挑戦に拠る所が大きく、共生の先行議論においてマイノリティ側に負担がより重く掛けられていると指摘されている通りの結果となっている。この点も、今後の課題として引き続き考えていきたい。

参照文献

足立祐子、押谷祐子、土屋千尋（2000）「コミュニケーション体験の場としての多文化クラス」土屋千尋他『多文化クラスの大学間および地域相互交流プロジェクトの実施の評価に関する研究』平成9～11年度科研成果報告書 pp.1-5

岩井朝乃（2006）「日本人大学生の「文化的他者」認識の変容過程 - 多文化クラスでの異文化接触体験から -」『異文化間教育 23』pp.109-124

植田晃次、山下仁編（2006）『「共生」の内実 - 批判的社会言語学からの問いかけ』三元社

岡崎敏雄（2003）「共生言語の形成－接触場面固有の言語形成」宮崎里司･ヘレンマリオット編『接触場面と日本語教育 - ネウストプニーのインパクト』明治書院 pp.23-44

岡崎眸監修（2007）『共生日本語教育学 - 多言語多文化共生社会のために』雄松堂出版

梶原綾乃（2003）「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育 117号』pp.93-102

金珍淑、野々口ちとせ（2007）「共生日本語の教室における参加者間の談話分析－非対称な力関係を示す発話行為を中心に」岡崎眸監修『共生日本語教育学－多言語多文化共生社会のためにー』雄松堂出版 pp.203-221

串田秀也（2006）『相互行為秩序と会話分析　―「話し手」と「共 - 成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社

杉原由美（2003）「地域の多文化間対話活動における参加者のカテゴリー化実践―エスノメソドロジーの視点から」『世界の日本語教育 13号』pp.1 - 18

杉原由美（2007）「留学生・日本人大学生相互学習型活動における共生の実現をめざして - 相互行為に現れる非対称性と権力作用の観点から」『リテラシーズ 3』くろしお出版 pp.97-112

戴エイカ（2003）「『多文化共生』とその可能性」『人権問題研究（大阪市立大学）』3、pp.41-52

森本郁代（2001）「地域日本語教育の批判的再検討」『「正しさ」への問い－批判的社会言語学の試み』三元社 pp.215-246

山崎敬一（1994）『美貌の陥穽 - セクシュアリティのエスノメソドロジー』ハーベスト社

Sacks,H （Edited by Jefferson, G. with an introduction by E. Schegloff）（1995）*Lectures on Conversation Vol.* Ⅰ Ⅱ, Oxford: Blackwell

Schegloff,E.A.（1991）Reflections on talk and social structure. In D.Boden & D.H.Zimmerman（Eds.）.*Talk and Social structure*：40-70. Cambridge. UK: Polity Press

Watson,R（1997） Some General Reflections on 'Categorization'and 'Sequence' in the Analysis of Conversation. In S.Hester&P.Eglin（Eds.）.*Culture in Action*: 49-75. University Press of America

（2007年12月1日受理）